

「契丹文字」を刻む石碑の発見

大谷大学・文学部・教授 **松川 節**

科学研究費助成事業(科研費)

世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究
(2009-2011 基盤研究(A))

新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築
(2012-2014 基盤研究(B))

アジア・アフリカ言語文化研究所
共同研究プロジェクト
「契丹語・契丹文字研究の新展開」
(2010-2012)



新たに発見された契丹大字碑文



エルデニゾー・プロジェクト 研究成果



中国北方に10世紀に生まれた遼王朝で使われた「契丹文字」は、資料数の少なさから解読が進んでおらず、特に「契丹大字」は異体字を含めて1600字～1700字程度が知られているが、読み方が推定されているのは188字のみ。

一般的に、仏典や、他言語との対訳資料等が古代文字解読の手がかりとなるが、契丹文字は、墓に収められた「墓誌」(大文字・小文字あわせて45点)を中心に、銅鏡や印章程度のものしか発見されていなかった。

モンゴル国における碑文調査の過程で、モンゴル・ドルノゴビ県のブレーンにあるオボー(積石塚)で、約150文字の「契丹大字」が刻まれた石碑を発見。紙の資料がほとんど存在しない契丹文字の解読を大きく前進させる成果。未詳の部分が多い契丹や遼の歴史を解明する手がかりとなる可能性。

1996年よりモンゴル国における碑文調査を行う中で、エルデニゾー僧院に残された石碑断片を網羅的に研究し、さらにエルデニゾー僧院自体の過去・未来・現在を総合的に研究。

2009年にエルデニゾー寺院で漢文・モンゴル文碑文断片や墨書を新たに確認することに成功。

研究成果は、2011年9月に国際交流基金の会議助成を受け、現地にて「エルデニゾー——過去・現在・未来——」という国際シンポジウムを開いて報告し、その論文集を英語とモンゴル語でそれぞれ刊行し、研究成果の地域への還元と、人文科学分野の国際的プロジェクトにおいて日本がいかに関与できるかを示すモデルを提示した。

2012年度より第2段階として、モンゴル仏教文化をキーワードに出土遺物と文献資料の統合を目指す。